

---

# 5人の勇者様

黒猫ひろき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

5人の勇者様

### 【Nコード】

N1812S

### 【作者名】

黒猫ひろき

### 【あらすじ】

画期的システムを搭載したTVゲームのソフトとして発売されたソフト

A.C. . . . . .そして、主人公コトネと他4人は…

ゲーム世界に閉じ込められてしまった！！

それには深いわけがあるという。

運営と、勇者たちがゲームユーザーを助けるべく

立ち上がった（勇者は立ち上がらされた

「LV・1」閉じ込められたぜ」

### 5人の勇者様

「LV・1」閉じ込められたぜ」

「なあ、ユカリー。次なんのクエスト行く？」

「そうねー…。討伐ばかりで疲れたから、採取クエストとか行きたいわ。」

ACというゲーム内でコトネとユカリがチャットをしている。

集会所と言われるこの場所で、次のクエストを受けようとしていた。

「んー…。」

「もう、早く決めてよ。」

2

コトネは、採取クエストの項目に所狭しと書かれたクエストの言わばメニュー表のようなものを眺めて、顔をしかめていた。そんなコトネを見るユカリは、ため息をついている。

「あつ、これなんかどうだ…って、あれ。」

一つのクエストを指さし、振り返るとそこにはユカリの姿はない。

「どこに行ったんだあ？まさか、優柔不断な俺に愛想を尽かしたとか…!？」

コトネが歩きだそうとしたその時、まるでコーヒークップに乗った後のような感覚に襲われ、気がつくとそのはさつきいた集会所とは違う場所だった。

「…なんだったんだあ？ ああ、気持ち悪い…。 って、ここどこだよ…。」

コトネは辺りを見渡した。

どうやら知らないフィールドに飛ばされたようだ。

このゲームをやり始めて、数か月経つコトネだがあまりの世界の広さに未だ未踏破なフィールドが多数存在していた。

「うう…。 状況が掴めんな…。 ん？」

コトネの頭上にみえるアイコンに灯りがともっていた。

メッセージアイコンと言われるやつで、運営・またはプレイヤーから送られたメッセージを読むアイコンだ。

コトネはメッセージアイコンを指で二回押した。

「運営からだな…。」

そして出てきたメッセージをまた指で押し、メッセージを開く。

「この度は、A・Cをプレイして頂き、誠にありがとうございました。ま

す。  
現在、ゲームサーバー内が凶悪ウイルスに汚染されています。

どのウイルス駆除ソフトウェアでも駆除できなかったのですが、そのウイルスの特性を調べる事だけは出来ました。そこで貴方をお願いしたいことがあります。

どうやら、ゲーム内部にウイルスが現れ、ユーザーに感染するタイプらしいのです。

ゲーム内部からウイルスを見つけ出し、駆除してほしいのです。

なお、全て駆除出来るまで貴方様の口

グアウトを禁止させてもらいましたのでご了承願います。」

長々しいメッセージを全部読み終え、コトネは豆鉄砲をくらったかのように、唾然としていた。

とりあえず、ログアウトをしようと試みる。

「ログアウト…ログアウト…っと。」

ログアウトボタンを押すと、目の前にポップアップが現れ、

「ログアウトできません。」

と出てきた。

(まじかよ…。)

「ログアウトできません。」

「ログアウトできません。」

「ログアウトできません。」

何度やっても結果は同じで、ログアウトなど出来なかった。

運営の言っていた通り、ログアウトが出来ない。

そして、コトネの頭はやっと他の情報を整理するのに至った。

「ウイルスがどうか言ってたな…。どういうことだろう。」

とりあえず、思ったことを返信してみることにした。

「ウイルスとはどういうことですか？  
駆除する人は俺以外にも居ますか？」  
送信。

数分経って、返信がきた。

「先ほど述べたとおり、ユーザーに感染するウイルスです。感染すると、電気信号を送っている眼鏡から、脳に有害な電気信号が発せられ、死に至ります。そして、駆除する人は貴方様を合わせて5人、運営の方で選ばせて頂きました。」

脳に有害な電気信号…。

そうだ。このゲームはもともと、オンラインゲームとして家庭用ゲーム機発売と同時に発表されたタイトルだ。

其のゲーム機のシステムはプレイヤーが眼鏡を装着し、その眼鏡から発せられる電気信号を脳が読み取り、脳に直接呼びかけることでその世界に入り込んだような錯覚を起こし、実際に手足を動かしている感覚でゲームができるのだ。

食べ物を食べれば、美味しいとも感じる。

コトネは情報を整理出来た所でまた返信を打つ。

「俺はどうすればいいんですか？ 他4人を見つける方法は？」  
今度は早く返信が来た。

「こちらが用意するウイルス討伐クエストをこなし、ウイルスを

駆除してください。なお、プレイヤーに感染されていた場合はそのプレイヤーの体力を0にすることで駆除出来ませんが、プレイヤーは死にませんのでご安心ください。

そして、選ばれた5人には共通のギルドに自動的に入ってもらいましたので、いずれ会えます。」

「とりあえず分かったことは、ログアウト出来るようになるには運営の言う通りにしなければならぬこと。他にも4人同じ境遇の人がいること。」

コトネは大きく伸びをした。

そして、自分の視界の端にギルドアイコンが増えていることに気がついた。

コトネは今までギルドに所属していなかったもので、すぐに気付いたのだ。

ギルドアイコンに気付くと同時に、運営からメッセージが来た。

「他4人の写真を後悔しておきます。

貴方様の役に立つと思いますので。

それから、ギルドメンバーなので、見かけることがあれば名前の横にギルド名が表示され、すぐに仲間だとわかるようになっていきます。では、ご健闘をお祈りしています。」

添付画像と書かれているボタンを二回押し、

添付画像を見た。

そしてコトネは驚愕した。

時間が止まったかのような感覚がした。

一番上の写真に見覚えのある顔が居たからだ。

そう、ここに来る以前、一緒に居たユカリだった。

ユカリとは幼馴染で、一緒にゲームをしていたのだ。

「ユカリまで選ばれたのか……。あいつ大丈夫かな。弱くはないんだけど、心配だな。まあ、負けても死ぬわけじゃないけどさ。」

コトネはつぶやき、足を進めた。

右上に表示されている地図によれば、この周辺に街があるのだ。

街に行かなければ、クエストに行くためのワープゲートもなく。

知っている街に行くためのワープゲートもない。

ホームと呼ばれるプレイヤーの家にもいけないのだ。

「街へ行かない事には始まらないからな。こういう時は落ち着かなきゃ。」

LV・1「閉じ込められたぜ」（後書き）

結構前から設定だけ書いて  
放置していた小説です。

なんか突然やる気が出てきたので、書きました。

前もここで書かせてもらっていたのですが  
諸事情で、アカウントを作りなおしました。

A・C・ 公共広告機構じゃないですよ??

ぽぽぽーんじゃないです。

ちゃんと意味はあります笑

「LV・2「なんじゃこりゃ！」」

「LV・2「なんじゃこりゃ！」」

街につき、ワープゾーンを通してホームに帰って来たコトネは、ソファアーに浅く腰かけて自分の武器である刀を研きながらクエストが来るのを待っていた。

コトネのホームは、静かで少し薄暗い。

あるものは、ソファアーとベッドと机・イス。

それから冷蔵庫とキッチンくらいのもので、他の家具は置いていなかった。

このゲームでは戦闘ばかりしていたから、家具には目をあてなかったのだろう。

必要最低限のものしかなかった。

ただ、料理スキルだけは高かった。

これは料理が戦闘の必需品だからであって、味を楽しんだりしていたわけではない。

「よし、これで完璧だな。」

研き終えた刀の刀身は、綺麗に光っていた。

刃の部分からは空中をも切り裂くような鋭さを感じられた。

それを腰に挿してある鞘にしまい、冷蔵庫からおにぎりを3個取り出した。

冷蔵庫の扉を閉めると同時に運営からメッセージが来た。

「コトネ様へ最初のウイルス駆除クエストです。平原エリア第三地区にてウイルス発生確認・すぐにワープゾーンから向かってください。」

（あそこは確か、モンスターのいない平和なエリアだったな。）

コトネはホームから出て近くのワープゾーンへ向かった。

そして、平原エリア第三地区に一瞬にして着いた。

そこには、モンスターが一匹もおらず、一面緑が続いているだけだった。

質感のいい芝に、心地よい風が吹き込むこの場所は、いいお昼寝スポットなのだ。

「まあ、ここになにかがいたらウイルスだろうな。」

マップのレーダーを見ながら、北へと進んでいく。

北に、少しだけ見えた赤い反応はモンスターを指すものだからだ。

マップで確認できたということは、そう遠くはない。

そう思ったコトネは早歩きで、刀の鞘に手おかけたまま、歩いていった。

すると、目の前に突然何かが現れた。

反射的に刀を抜き、目の前の何かを斬りはらおうとするが、見事にかわされ、10mほど先に着地した。

「うおっ!?!? なんだこりゃ!」

目の前で動いている何かは、まさになんだこりゃ! というビジュアルをしていた。

パソコンの画面にウイルスが入り込んだ時のようなバグ画面と、無数のポップアップで構成されているような体だったのだ。

「これが…ウイルスカ…なんか、不気味だな…。」  
コトネは刀を構え、ウイルスの出方をうかがう。

(まあ、楽勝だろう。)

そう思うと同時に相手が動き出した。

一瞬で目の前から消えたウイルスは一瞬にしてコトネの頭上に現れ、まるで雷のように落ちて来た。

それをコトネは横に跳んで避け、また刀を構えた。

すると、ウイルスはまた瞬間移動し、コトネの眼の前に現れ、無数のポップアップ画面で出来た腕(?)を伸ばしてきた。

その腕に弾き飛ばされたコトネは草原を3回転宙返りし、体を強く地面に打ち付けられた。

「早い…。今まで闘ってきたどんなボスよりも早く、強い…!。」  
今度はコトネが足を踏み出し、駆け出した。

コトネのスピードは能力値で150分の100で、恐ろしく早かった。

瞬間移動とまではいかないが、走るだけでまわりの芝が吹き飛び、宙に舞うほどだった。

そして、ウイルスの頭上から刀を振り下ろし、目にもとまらぬスピードで1回、2回、3回…と切りつけていく。

だが、無数のポップアップで出来たそれは腕をもがれた程度の傷を負っただけだった。

「チイ…」

後ろに跳躍し、態勢を立て直したコトネはもう一度足を踏み出した。

ところがウイルスは構うことなく、我が家でくつろぐ休日の父親のようにそこにただ居るだけだった。

「余裕かましてんじゃねーよ。」

コトネは、視界の端にあるアビリティアイコンを刀でつつき、刀を水平に構えて突っ込んでいった。

「水斬撃！」

刀が水で覆われ、ウイルスとの距離を開けたまま水平に空中を斬りつけた。

すると刀から鼓膜が破れそうなほどの雄叫びを上げながら水でできたまるで神話か、小説にでも出てきそうな竜が出てきた。

そしてその竜はウイルスめがけて猪突猛進していく。

そしてウイルスは竜に一瞬にして飲み込まれていった。

「やつたか…？」

竜が去って行った後を見ると、ウイルスの姿は無く、頭上からクエスト達成音楽が流れている。

「早いだけで、案外弱かったな…。」

そして、クエスト達成音楽が止まり、ワープゾーンに強制送還された。

初のウイルス討伐クエストは無事達成され、コトネはほぼ無傷。

食らったのは、ほんの少しだけだった。

ホームへ帰る頃には、もう黄昏時で人の数もまた増していたのだった。

LV・2「なんじゃこりゃ！」（後書き）

んー。 どうなんだろうか、これ。

需要があるのでしょうか。 同時で、なんか中2病てきなのが、  
東方二次創作小説かきたいかも。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1812s/>

---

5人の勇者様

2011年10月8日22時43分発行